

令和4年度第2回 最上創生懇談会における主な意見
＜テーマ「山形くらしを楽しむ（県民の幸福度向上）」＞

日 時：令和5年2月17日（金）

開催方法：ウェブ会議

（1）1巡目「山形くらしの中でどういう時に幸せを感じるか。」

■村井 美一氏（肘折温泉若松屋村井六助 専務取締役）

広い話になるので、私は大蔵村肘折において、話をしたいと思う。私は、婿で肘折に来た。初めてきたきっかけが、希望大橋の建設に携わったことだった。その頃から思っていたが、これは施錠率の低さにも関連してくることかと思うが、人と人とのつながりや関わりが非常に深い。こういったことは、関わり合っていない地域からすると幸せなことではないかと思う。実際、希望大橋は困難な工事だった。その中で、みなさんに「頑張って」や「よろしくね」などの励ましの声をいただき元気づけられた。今でもそういったつながりが続いている。周りに目を配ったり、声をかけたりといったやさしさは、この地域だからこそこの良さである。

もう一つは四季折々の自然、その瞬間にしか見られない景色や色合い、四季を感じられるところである。肘折は全国でも豪雪として有名だが、厳しい冬を乗り越えた後に迎える自然の恵みなど、肘折だとよく感じられ、幸せなことだと思う。

■本間 真生氏（金山町地域おこし協力隊）

私が思う幸せは、1つはご近所付き合いがあって、人とのつながりや温かさを感じる場所。金山に来て2年目だが、朝、出勤する際、近所の方に会うと、「いってらっしゃい」のあいさつや体調の心配をしてくれる人が周りにはいることはありがたい。お裾分け文化があって、「ちゃんと食べてる？」と周りにお父さんやお母さんがいるよう。親戚はいないが、第2の家族がいるように感じてあたたかい気持ちになる。

2つ目が、四季折々のアクティビティで遊べることに豊かさを感じる。春の山菜採りからはじまって、夏は川遊びや釣り、秋はなめこ採り、冬はスキーをしたり。また、最近は狩猟免許を取得した。自然が身近にあるからこそ、それを楽しむことができるし、先人から楽しみ方を学ぶことも楽しい。受け継がれていく誇りや、それと一緒に自然の陰しさなども教えてもらえる。山に行くのは疲れるが充実感もある。いっぱい採れたらご近所さんにお裾分けするなど、そこに循環があるなども感じる。生活の中に自然の豊かさや先人からの知恵があるとところに幸せを感じる。

■都市 一郎氏（株式会社アドバンス&ウェルビーイング 代表取締役）

私自身もともと東京生まれ、東京育ちで25年間東京におり、仙台で勤務した後、新庄に来た。一番初めに感じたのが、通勤時間が非常に短いこと。時間の無駄がなく、通勤ラッシュもなく楽である。

自然が豊か。近いところに山や海があり、自然を身近に感じることができる。子どもが小さいうちは、海にも山にも連れていった。東京にはない自然豊かな環境がある。私の趣味であるゴルフにも10分で行くことができる。東京は2時間かけて行くのが普通で、しかも料金も1/3で、楽しんでやることができ

いる。

住んでいて感じることは、町自体がコンパクト。買い物にしても食事にしても、役所、病院も家から5分程度で行ける。無駄な時間も無く、すぐに行動でき便利である。

逆に、ビジネス的には困る部分でもあるが、市民性なのか、おおらかな方が多く、のんびりしている。時間がゆっくり流れているイメージ。せかさされる感じがなく、いい意味で田舎を感じる場所は、山形にいて幸せを感じる場所である。

■中鉢 春美氏（最上峡芭蕉ライン観光株式会社 最上川舟下り船頭）

みなさんおっしゃるように私も自然が一番だと思う。職業柄、自然を求めて来る方といっぱい会う。そういう求める方がいっぱいいるところに自分がいることは誇りに思う。コロナや世界情勢に関わらず、川はとうとうと流れ、春になれば桜が咲き、鳥のさえずりが聞こえる。毎日違う景色を見せてくれる戸沢村に住んでいて、幸せだなと感じる。

また、車さえあれば自由に移動できる。乗り物の時間も気にすることはないので、自分で決めて行動できる。せかさせる感じもなく時間がゆっくりしている。

私も山菜採りが好き。秋は沢蟹やもくず蟹。冬は鮭。当たり前のようで実は当たり前ではなく、ここでしか味わうことができない。

コロナでダメージを受けたが、インバウンドが復活してきた。今日は7割から8割が海外の方だった。海外の方へもこの地域のいいところをアピールしていきたい。

■高橋 孝一氏（有限会社高菊林業 代表取締役）

私もこれまで東京、千葉に住んでいたことがある。これまで、暮らしていて幸せを考える機会が無かったが、このテーマをいただいて、改めて考える機会となった。普段の生活で幸せを感じる瞬間をピックアップしてみた。今、一番幸せを感じることは、家に帰ると子どもたちがいて、妻と一緒にお酒を飲むことが幸せだなと感じる。

あとは、山形は家が大きいの。生活の基盤となる家が広いことは幸せを感じる一因ともなるのではないかな。また、自然の景色は何ものにも代えがたい。改めてみると雪景色もきれいだし、家から見える鳥海山もきれい。こういった豊かな自然は幸せを感じる根源にもなっているのではないかな。あとは、ラーメンがおいしい。消費額1位。都会の行列のできるお店に比べてもご飯はおいしいと思う。

最終的に、山形に暮らしていて不満がないのが一番の幸せであるというのが今回の結論である。

■高橋 杏奈氏（新庄東高等学校3年）

私は楽しい時間に幸せを感じる人が多いので、楽しい時間について考えてみた。

まずは、みなさんがおっしゃっていたように自然が豊かであることが大きい。緑がたくさんあって、空気がおいしい。学校で旅行に行った後など、山形に帰ってくると安心する空気感がある。私たちの年代は、ゲームなどで家にこもっているイメージが強いと思うが、私は外で遊ぶことが大好きなので、春は花見、夏はキャンプ、冬はスキーなどで楽しんでいる。

また、山形にはフルーツ、お米、山菜など、おいしいものがたくさんある。学校で青山学院大学との交流授業があったが、山形のお米や山菜は、東京で高く売られていると聞いた。隠れた名店を友達と共有す

る時間も楽しい。

最後に私が一番幸せを感じることは、地元の人々の温かさ。みなさんととても優しく、困っていることがあると協力してくれる。分かりやすいのがお祭り。小さいお祭りでも地域の人々が力を合わせてやり遂げることは、すごいことだし、子どもたちもその姿を見ている。また、それぞれの地域の方言もいいと思う。標準語だと思っけていても方言だったりする。方言は魅力的だし、最近では話す人が少なくなっているが、方言を聞くといいなと思う。

もう一つは、新庄東高校の授業の中で行うプレゼンテーションで、地域の企業の方とタイアップして、高校生の視点から事業を考えるものがある。地元の人と高校生が話し合いをしながら、みんなで地域を盛り上げていることがいい点だと思う。

■齋藤 優子氏（生産者団体「最上ラズベリー会」会長）

杏奈さんの発言を聞いて幸せを感じた。家庭だけでなく、地域の多くの大人たちも子どもたちと積極的に交流していて、ここに住んでいて幸せだなと感じる。

私も自然を感じながら日々の暮らし、仕事ができることに幸せを感じる。農業やっているので外で仕事をすることが多い。毎日、鳥海山の夕焼けをつい写真に撮ってしまう。あるものは変わらないのにとっても惹きつけられる。自然の中でできることがたくさんあるし、そういったところで子育てできる場所も良い。

また、食べ物がおいしいと県外の人から声をかけてもらう。この地域に住んでいると、食卓にのぼるものは、知っている人が作っているものでしょう。生産している人の顔が見え、食べ物から豊かさを感じる。私も農業をやっているのもそういったことに関われることに幸せを感じる。寿命が長くなってきて、健康で元気であることが重要になってくる。食べ物はその根幹である。

■五十嵐 忠一氏（株式会社アイオイ 代表取締役）

コロナや鳥インフルエンザなど、目に見えない恐怖に全力で取り組んでいる。

私は今年で68歳になり、孫が8人いる。孫と接することが今一番の幸せ。子どもたちは県外におり、たまに来る孫のために頑張っている。

人生、つらいことや大変なこともあり、幸せは少ししかない。幸せを話し合うことで互いに幸せを感じることができる。

私は、今もスポ少に携わっている。これまでの教え子と今でも話したりする。今年の夏、高校野球で仙台育英高校が東北に優勝旗を持ってきてくれた。山形県人が3人も選手としていたことが非常に誇らしかった。最上地域はスポーツでも域外にいつてもしまいが、全国で活躍する子どもたちは誇らしい。最上地域のスポーツの発展にもつながってほしい。

(2) 2巡目：「山形県の誇り、地域の誇りと思うところは。県外に出て初めて知った山形県の良さ、地域の良さは。(県外居住経験者)」

■村井 美一氏 (肘折温泉若松屋村井六助 専務取締役)

最上地域、大蔵村肘折は、自然と調和した歴史、温泉、それを守り続けてきた人々の生活など、循環が色濃く残っている。県内全域に言えることでもある。入浴文化は江戸時代から続いており、古くからの温泉文化が信仰にもつながっている。肘折温泉もそうやって皆さんにありがたいものだと思ってもらえて、湯治場として代々受け継がれてきた。これは、後世に守るべきものである。食文化、伝統芸能も同じで大事にしていかなければならない。しかしながら最近は法改正であるとか、人口減少などで守っていけない可能性も出てきている。

そういった時に医療の部分で、もう少しステップアップできないかと考えている。東京都が行っているLive 119などのように。肘折は救急車が来るまで25分かかる。その間、消防団が活用できる仕組みを検討できないか。そういった仕組みをこれまで築いてきたものの上乗せして次世代に引き継いでいければと思う。

■本間 真生氏 (金山町地域おこし協力隊)

地域の誇りは、獲得する力、生産する力=生きる力があるということ。

先ほど山菜、魚、狩猟の話をしたが、もともと自然の恵みが豊富でそれが近くにある。それを採る技術と知恵があることは、誇りに思う。山に行ったからと言って、誰もが山菜やきのこを採れるわけではない。代々受け継がれてきた経験などがあると感じている。また、山形県は、食糧自給率第3位。米や野菜など、手間暇かけて作っている精神と愛情がすごい。農業に携わっている人がたくさんいることも素晴らしいし、自然のものが身近にあることは、生きる力が山形県にはすごくあるということだと思う。

今年出張が多く、東京に行って感じたことは、山形は何も無いのが良い。東京は情報にあふれている。宣伝だったり、人だったり、歩いていても避けて歩かなければならない。道にしてもいろんな選択肢がある。山形は大きな空でまっすぐで何も無い道で、考える余白が生まれる。情報量や人が少ないことで心落ち着く毎日が過ごせるのではないかな。

■都市 一郎氏 (株式会社アドバンス&ウェルビーイング 代表取締役)

県外移住者で転々としていたので帰属意識がない。仕事でも国内外を渡り歩いているので、山形をよく知らないというのもある。プライドを感じないのが正直なところ。

10年も前のことだが、海外のバイヤーに山形から来たというと、果物、牛肉が知られていた。物産展をやりたいという声もよく聞いた。かつては冷凍の技術が進んでなかったのも、そこまで輸出されていなかったが、海外でも高値で売られていた。食文化は外から見ても誇れるものである。最近、日本酒も同様である。

遊びに来る友人は川とか山に感動する。東京にあるものがこっちにはないが、東京にないものもたくさんある。ないことが山形の可能性を感じる。山形のビジネスチャンスが広がる。特に農業関係はかなり広がっていくのはないか。山形はビジネスとしては、ブルーオーシャンであり、競合がないので、思いついたことは最初に行ける。試験的にスタートアップするのに良いし、失敗しても小さく収まる。そう

いう場所を提供したいという考えがすごくある。こらっせ新庄では、3年前に、コワーキングスペースとして使用できるフィエスタを開設した。新庄東高生徒が主体となって作ってくれた。今は、新庄南高の総合ビジネス科の生徒がイベント開催に向け、活動している。学生が活躍できる場所を作れば、まち全体が学生から社会人までが結びつき、活動が広がっていくと考える。

■中鉢 春美氏（最上峡芭蕉ライン観光株式会社 最上川舟下り船頭）

私が思う誇りは、自然も人も方言もそのままが良い。お金をかけて作るのではなく、そのままあることが誇り。

雪にも強い。都会は少量の雪でパニックになる。雪が商品にもなる。

あとは、食べ物おいしい。新鮮なものをすぐ食べられる。地産地消で安く旬なものを食べられる。都会のそばを食べて、改めてこちらのおいしさに気づいた。

以前、旅行好きのお客さんに、「海外にいかななくてもこんなにいいところがあるんだ」と言われたときはうれしかった。お金で買えない幸せもたくさんある。お金をかけなくても幸せを感じるのが最上地域ではできるのではないかな。

■高橋 孝一氏（有限会社高菊林業 代表取締役）

私は、東京都や千葉県に5年ほどいた。学生時代は都会の方が楽しかったが、今はこちらの方が、住み心地が良いと感じる。まずは空気がきれい。都会は空気がよどんでいたように感じていたが、こちらは夜外に出ると星がきれい。

あとは、妻とも話をしたところ、子育てがしやすいということだった。他の場所で子育てしたことがないので比較対象はないが、都内と行き来している方からも、絶対山形の方が育てやすいと断言していた。地域の方たちから見守られている感じもあるし、子どもを育てる体制がしっかりしているように感じる。子ども達も自然の中でのびのびとしている。真室川町では、通園のバスに地域の人に乗ってくれる。子どもを地域の宝だといってくれるのは幸せに思う。人のつながり、自然、年を重ねるたびに幸せなところだと感じる。

■高橋 杏奈氏（新庄東高等学校3年）

私が誇りに思うところは、人の良さ、温かさ、つながり。人との距離が近いのでお裾分けしあったり、外で遊んでいる小さな子どもの見守りなど、私も小さい頃から、人の好きが伝わってきた。何かやりたいことや、協力してほしいというとき快く協力してくれたり、話を聞いてくれたり、手を差し伸べてくれる。私は、物心ついたときから新庄が好き。新庄まつりも県外に出た人も祭りの時期に戻ってくるほど、地元愛が強い。山車作りなども地域の人とつながることができる。

私は地域活動グループのWATSに所属している。高校生が自発的に地域を明るくすることを目的に、映像や音楽制作を行っている。私はキャプテンとして、去年は地元の良さや課題を含めた短編映画を作成し、今まで知らなかったことや人のつながりなどを広く知ることができた。今まで関わることがなかった市役所や交通機関の方など、年齢や職業が違う人との意見交換をすることができた。新庄は、少子高齢化、若者の流出が問題となっているが、我々若者の目線からも感じていることだった。それを解決したいと思い、活動してきたが、商店街で活動することで、テレビや新聞で取り上げられて、少しずつ元気、

笑い声が聞こえてきて良かった。祭りや人のつながりを感じられる新庄で育ってきて良かったと思える。今後、県外に進学するが、新庄とのつながりを大切にしていきたい。

■齋藤 優子氏（生産者団体「最上ラズベリー会」会長）

私は、短大卒業後に埼玉で就職し、その後新庄に戻ってきた。山形に帰ってくる時の新幹線では、山を見てふるさとに帰ってきたなと温かい気持ちになった。

仕事で都会に行ったりすると思うことが、電車や駅ではパーソナルスペースがなく、緊張する。人によって違いはあるが、こちらはバランスがいいのだと思う。先ほどから人の温かさや親切なところなど、話がでているが、近くにいるが近づきすぎず、自然に距離感をとるのが上手な人が多い。お嫁に来て、違う環境のところに来たのだが、困りごとや話を聞いてくれたり、寄り添ってくれる人がいると、たいていのことは乗り越えられる。雪国で大変なことも多いが、そうやって支え合える環境が作られてきた。

ランキングを見ると、不登校の生徒率の低さとか、待機児童の低さとか、関わろうとしている、関係作りをしようとしていることが高い県だと思う。

農業でも、自然の良さを活かした関わり合いを作れると思えば、不登校や社会になじめない人を受入れている。自然の中で作業することで、エネルギーを高められ、次のステップに進むことができている。農業でこれから地域や人々に貢献していけるのではないかと思っている。

先日、メディカルツアーのニュースを見たが、私にも何かできるのではないかと楽しみにしている。

■五十嵐 忠一氏（株式会社アイオイ 代表取締役）

農業関係で話をさせてもらおうと、最上農業法人研究会というものがあり、40数社加盟している。青年部との関わりが楽しい。コロナ禍前は、学校訪問や企業訪問など、ジャンルは違うが連携してやっていた。他ではない組織で、今後、農業を最上から発信できる。一人では限界があるので、連携してやっていきたい。

鮭川村の地域おこし協力隊の松並さんの紹介で、酒田市のサカタントに出店することができた。山形県では、鶏の産地だということが知られてこなかった。最上を鶏の産地にということで、6次化にも注力していきたい。

今回、話す機会をいただけてよかった。最上の良さをみんなと連携してやっていきたい。今後、東北農林専門職大学や道の駅もできる。ステップアップの機会としてぜひ協力してやっていきたい。